

## 説教ポイント

主の庭を慕って

ヨハネ四・七〜一五

詩篇八四

「主の庭を慕って、私の魂は絶え入りそうです」詩篇八四篇の詩人は主なる神とあいまみえる喜びを思い描いています。「まことの礼拝をする者たちが、霊と心理をもって父を礼拝する時が来る」とイエスが語るのも、まさに同じ喜び。

その「喜び」から長く遠ざけられていた人がいました。イエスが今日、サマリアの井戸辺で出会った女性です。なぜ遠ざけられていたか。理由は彼女の登場の仕方に垣間見えます。

「正午ごろのことである」（六節）。水の豊かな日本では意味がわからないかもしれませんが、あの灼熱の砂漠、イスラエルの北方が舞台であったとしたら…。何かわけがあると現地の誰もが勘づいたはず。かの地では涼しい朝方に水を汲みに

集まり、「井戸端会議」をひとしきり楽しんで帰って行くのが常でした。なのになぜ、よりによって一日で最も暑い正午にたった一人で水を汲む？ 続きを読むと分かります。彼女には人目を避けねばならない理由がありました。「五人の夫」とは自身の人生であると同時に、帝国に蹂躪された北イスラエルの人々の運命でもありました。唯一の神への信仰を潰そうと異教の民と強制的に混血させられた。やがて兄弟であったユダヤの民からも差別され、共に神を礼拝することさえできない。炎天下、人目を避けて水を汲む女性の姿に民族の苦しみが重なりあう。

そんな彼女にイエスは「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。その人の内で泉となり、永遠の命の水がわきでるからだ」。彼女は即答します。「その水を私にください。もうここに汲みにこなくてもいいように」。主の庭に憩う自らの姿を、イエスの中に見て取ったのです。